日本宗教学会 第77回学術大会

パネル発表要旨集

学術大会　会期：2018年9月7日(金)－9日(日)
　　会場：大谷大学　京都／本部キャンパス

開催パネル一覧　　場所：慶聞館2階／4階

	部会	教室	パネル題目	代表者
8日(土) 14：00～	1	K214	世俗社会における「宗教的なもの」を再考する	伊達　聖伸
	2	K205	21世紀の日本仏教・仏教学と社会貢献	下田　正弘
	4	K208	真宗寺院の現状と展望－浄土真宗本願寺派宗勢基本調査より－	吉田　秀和
	6	K210	没後100年からの井上円了研究に向けて	井関　大介
	11	K410	西田幾多郎未公開ノートの研究資料化－「宗教学講義」を中心に－	浅見　　洋
	12	K411	宗教者のケア、ケア者の宗教性－川崎市調査から－	堀江　宗正
	13	K405	仏教と近代アジア－教団・教育・教養－	何　　燕生
9日(日) 13：15～	1	K214	宗教研究の振興と学会・学会連合の役割－学術会議との対話－	藤原　聖子
	2	K205	井筒「東洋哲学」の地平と宗教研究	澤井　義次
	3	K206	人口減少時代における地域と寺院のあり方研究	木越　　康
	4	K208	近代の仏教思想と日本主義－親鸞・禅・日蓮－	名和　達宣
	5	K209	身心変容技法と霊的暴力－負の感情処理のワザの考究－	鎌田　東二
	6	K210	東西を往還する日本仏教－鈴木大拙とその周辺の思想交流から－	守屋　友江
	7	K211	現代世界における「宗教性」の変容－日本と中国の事例から－	長谷千代子
	8	K407	戦後日本の宗教者平和運動のトランスナショナル・ヒストリー	大谷　栄一
	9	K408	技術社会と宗教－人工知能の実装化が持つ宗教的意義について－	木村　武史
	10	K409	世界8か国における共通の宗教性と宗教度	川端　　亮
	11	K410	大学内宗教者養成の歴史・制度・実態に関する調査報告	江島　尚俊
	12	K411	暦を通して宗教史を語りなおす	林　　淳
	13	K405	キリスト教殉教と歴史的記憶	カルラ・トロヌ
	14	K406	宗教施設を地域資源とした地域防災のアクションリサーチ	稲場　圭信

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

国際委員会企画　英語使用

世俗社会における「宗教的なもの」を再考する

代表者：伊達　聖伸

現代社会における宗教的なものに対する視線の交錯　伊達　聖伸（上智大）
「所属なき信仰」から「代行の宗教」へ　グレース・デイヴィー（エクセター大）
ソ連解体後のロシアにおける「所属なき信仰」と「代行の宗教」　井上まどか（清泉女子大）
ポスト世俗化社会における宗教と観光　岡本　亮輔（北大）

司会：伊達　聖伸（上智大）

いわゆる「世俗化」が進んできたと言われるヨーロッパは、かつては近代化の普遍的なモデルを体現していたように思われていたとするならば、世界的な宗教復興が進んでいるとされる現在では、むしろ地域的な例外を示しているようにも見える。しかし、そのヨーロッパにおいても、宗教はたんに衰退しているというのではなく、むしろ宗教的なものの再編が起こっているものと考えられる。その様子を理論的な枠組みにおいて把握し、そして具体的に論じるためにはどうすればよいのだろうか。

そのためにはさまざまなやり方が考えられるが、本パネルは、イギリス宗教社会学の泰斗であるエクセター大学名誉教授のグレース・デイヴィー氏を迎え、「所属なき信仰」（believing without belonging）や「代行の宗教」（vicarious religion）という鍵概念の掘り下げと多角的検討を通じて、現代宗教の特質に迫ろうとするものである。デイヴィー教授は現代イギリスの宗教を論じた *Religion in Britain since 1945* を 1994 年に刊行したが、2015 年にその全面改訂版 *Religion in Britain: A persistent Paradox*, Wiley Blackwell を出している。近年のイギリス社会の大きな変化を踏まえながら、世俗社会における「宗教的なもの」をとらえ返す理論的な視座と具体的な分析を行なっている。デイヴィーの理論的枠組みや分析概念は、すでに日本の宗教研究においても一部では知られており、それを用いた研究もなされてきているが、その批判的検討はまだ十分とは言いがたい。日本社会に「所属なき信仰」や「代行の宗教」という概念を適用することの是非、有効性や妥当性を問うことも含め、対話的なパネルとしたいと考えている。

パネルの構成は、以下の通りである。

まず、代表者・司会である伊達聖伸が、パネル全体の趣旨説明を行ない、デイヴィー教授の事績を紹介する。「所属なき信仰」や「代行の宗教」が、伊達の専門領域である近現代フランスの文脈にどの程度当てはまるものなのか、日本の宗教研究にどのような意味を持ちうるのかという論点についても簡単に示唆するつもりである。

次に、グレース・デイヴィーが、彼女の研究者としてのトレード・マークでもある「所属なき信仰」と「代行の宗教」という概念の内容を提示し、この概念を用いながら現代のイギリスおよびヨーロッパにおける宗教状況の趨勢を読み解く。2 つの概念の相補的な関連を示し、また「世俗化」と呼ばれる現象の逆説や多様な側面について分析を加える。

次いで、ロシア（旧ソ連地域）を専門とする井上まどかが、「所属なき信仰」や「代行の宗教」という切り口が、ソ連解体後のロシアの宗教状況を分析するのにどれほどの有効性を発揮するものであるかを具体的な事例をもとに検討する。

最後に、ヨーロッパおよび日本をフィールドに巡礼研究を進めてきた岡本亮輔が、両地域の事例を比較しながら、観光化される宗教のあり方を分析する局面において、「所属なき信仰」や「代行の宗教」の概念がどの程度有効であるかを検証する。

全体を通して、「所属なき信仰」と「代行の宗教」という 2 つの鍵概念が、どれほどイギリス的な性格を帯びているのか、あるいはイギリスを超える性質を備えているのかが浮かびあがってくるようなパネルにしたいと考えている。

なお、本パネルは、国際委員会の企画として行なわれる外国語（英語）パネルである。パネル全体および各発表者の英語表記は以下の通りである。

Rethinking “the Religious” in Secularised Societies

Kiyonobu DATE (Sophia University), Different Perspectives on the Religious in Contemporary Societies

Grace DAVIE (Exeter University), From “Believing without Belonging” to “Vicarious Religion”

Madoka INOUE (Seisen University), “Believing without Belonging” and “Vicarious Religion” in Post-Soviet Russia

Ryosuke OKAMOTO (Hokkaido University), Religion and Tourism in Post-Secular Society

開催校特別企画①

21 世紀の日本仏教・仏教学と社会貢献

代表者：下田　正弘

東方仏教徒協会（EBS）と大谷大学　井上　尚実（大谷大）
学問の中からのこの世に応じる仏教の声－EB 誌の使命－　マイケル・パイ（マールブルク大）
イデオロギー論争によって分断された世界にある仏教・仏教学　ジョン・ロブレグリオ（オックスフォード・ブルックス大）
仏教者の社会貢献とは何か－精神的苦痛からの解放－　蓑輪　顕量（東大）
仏教・仏教学と社会貢献－EB 誌をめぐって－　下田　正弘（東大）

司会：井上　尚実（大谷大）

2017 年 4 月 1 日、創立以来 96 年の歴史を誇る The Eastern Buddhist Society（EBS、東方仏教徒協会）が正式に大谷大学に移管され、新たな活動の一歩を踏み出した。この機会に、1 世紀に及ぶ EBS の伝統を振り返るとともに、宗教学的観点から、今後 21 世紀の社会において EBS と EB 誌はどのような役割を果たすべきなのかという展望を開くパネル討議を行いたい。

1921 年の EBS 設立時、その中心メンバーは鈴木大拙（1870-1966）と妻のベアトリス・レイン・スズキ（1878-1939）、そして佐々木月樵（1875-1926）、山辺習学（1882-1944）、赤沼智善（1884-1937）という当時の大谷大学の教授陣であった。EB 誌は仏教学の研究成果を世界に発信し、当時西洋ではまだ正当に認識されていなかった大乗仏教・親鸞思想の重要性を伝えていく役割を担ったのである。また、学問的レベルで大乗仏教を世界に発信すると同時に、仏教の基本的理念（縁起・慈悲・空・回向など）を現実社会に伝え、仏教を現代世界に相応する意義のある（relevant な）思想とすることを目標としていた。EB 誌編集者として大拙が掲げた Editorial に示されているように、仏教も仏教学も社会的な意義を有するということを大切にしてきたのである。

1966 年の鈴木大拙没後も EB 誌は New Series として発行を継続し、文献研究から禅の思想、京都学派を中心とする哲学的な論文・評論まで、幅広いジャンルをカバーしてきた。しかし近年は、現実社会に意義をもつ思想として仏教を伝えるという初期の目標から遠ざかり、専門性の高い研究論文の掲載が増えているのではないかという批判も一方にある。2011 年の東日本大震災以後、仏教・仏教学に対する社会の期待も変化しつつある今、EBS と EB 誌は、何を中心にしてどんな方向に進むべきなのか。編集に携わる側の視点、仏教者・仏教研究者としての視点を交え、3 年後の EBS 創立 100 周年を見通した議論を行いたい。

1）まず初めに井上尚実（司会・大谷大学教授）がパネルの趣旨を説明し、1921 年から 2018 年現在に至る EBS と大谷大学との関係について、主に組織的位置づけの変化に着目して課題を論じ、パネル全体の導入とする。

2）次に EB 誌の編集長を務めるマイケル・パイ（マールブルク大学名誉教授）が、EB 誌の歴史と現状、今後の展望について、宗教学的な見地から論じる。特に、仏教文献の言語学的研究や史学的な仏教研究と、より直接的に仏教の立場から人権・平和・環境など現代社会の問題について主張を展開する論文の区別およびそれら相互の関係に着目する。

3）続いて 2017 年に着任した EB 誌編集者ジョン・ロブレグリオ（オックスフォード・ブルックス大学助教授）が、仏教学・仏教思想は現代社会の様々な社会問題に対してどのような意義をもちうるかという可能性について論ずる。「どうしたら仏教は 21 世紀社会に relevant な存在となりうるか」という観点から、今後の EBS と EB 誌について、一つのヴィジョンを提示する。

4）次に現代日本の仏教学・思想史研究をリードする立場にあり、仏教者として社会活動にも積極的に関わって発言を続ける蓑輪顕量（東京大学大学院教授）が、「仏教者の社会貢献とは何か」という基本的な問いに答える形で提言を行う。

5）最後に EB 誌の編集顧問を務める下田正弘（東京大学大学院教授）が、上記の発表に応答しながら、21 世紀の仏教・仏教学と社会の関係について、さらに EBS と EB 誌の課題と可能性について、総括的に考えを述べる。

真宗寺院の現状と展望－浄土真宗本願寺派宗勢基本調査より－

代表者：吉田　秀和
第 10 回宗勢基本調査からみる寺院の護持について　長岡　岳澄（中央仏教学院）
寺院運営の形態と寺院護持の課題　山本　哲司（龍大）
宗勢基本調査にみる寺院の護持・運営の問題点と展望　吉田　秀和（龍大）
コメンテータ：中西　尋子（関西大）
司会：長岡　岳澄（中央仏教学院）

現代社会における寺院の役割がさまざまに再検討されているなかで、寺院の現状を把握していくことは一層重要性を増している。

浄土真宗本願寺派では、宗派内において定期的な実態調査が行われている。この調査は、国勢調査になぞらえられ、「宗勢基本調査」と呼ばれている。浄土真宗本願寺派が包括する一般寺院及び非法人寺院を対象に宗派の趨勢を把握するための統計的調査である。調査目的は、宗門の抱える諸課題への適切な対応解決を図るための基礎資料を得ることである。とりわけ近年では、単なる実態の分析にとどまらず、調査時点で抱える本願寺派の課題を掘り起こし、具体的な宗務活動に資する分析が求められてきている。本願寺派内部でのこうした調査活動は、1959 年の第 1 回調査からおおよそ 5 年ごとに実施されており、これまでに 10 回の調査が行われた。

本パネル発表では、宗勢基本調査の結果をもとに寺院の現状と展望について検討を加えていきたい。

発表者 1 の長岡は、第 10 回宗勢基本調査（2015 年）の結果のなかから、特に寺院の護持・運営について考察を加える。従来の調査では、寺院の護持・運営について「十分護持・運営できる」「なんとか護持・運営できる」「護持・運営はきびしい」「まったく護持・運営できない」という選択肢で尋ねており、この回答は、寺院の年間収入といった経済的要因が関係し、また、それは、葬儀件数、門徒戸数との関連が指摘されてきている。この点について第 10 回調査から確認するとともに、その上で、経済的要因以外の護持・運営と関係する要因として、地域性や寺報の発行などの寺院のさまざまな活動との関連について検討していく。

発表者 2 の山本は、寺院運営の形態による寺院活動の諸特徴を概観し、寺院護持への課題を探る。過去の宗勢調査や関連する聞き取り調査、ならびに先行研究から寺院の運営には 3 つの形態が想定できる。森岡清美は、かつて『真宗教団における家の構造』において、寺院の社会学的研究上の基点として、寺院の運営形態に焦点を当てている。森岡は、寺院運営を大別して「門徒団持ちの寺と住職家持ちの寺」のふたつのタイプに整理している。本調査においては、森岡の指摘するように住職（家）主導の寺院運営、門徒（団）主導の寺院運営のふたつのタイプを問うと同時に、もうひとつのタイプを想定している。森岡が指摘した 1970 年代の議論から、寺院をとりまく社会状況は大きく変化している。例えば、寺院経理の透明化などの問題を巡り、近年では“住職－門徒協同”による寺院運営への動きが散見される。第 10 回の宗勢基本調査では、社会環境の変化に対する寺院の運営状況を把握するため、以上の 3 つの運営形態を確認している。この報告では、寺院運営の形態にかかわる寺院活動状況を分析し、寺院護持へ向かう課題を考察する。

発表者 3 の吉田は、寺院の護持・運営の問題と課題を調査の結果より整理・報告する。最新の宗勢基本調査において本願寺派寺院の多くが周辺地域を農山漁村地（53.1%）と回答している。その反面、住宅地（31.0%）、市街地（15.9%）と都市型地域に立地する寺院は少ない。この立地条件を背景として、本願寺派寺院の抱える問題は過疎化・高齢化地域に特徴的にみられる若年層の流出による人口減少、そのことによる次世代への宗教意識の相続の難しさに起因するものが指摘されてきた。このようななか、また、住職が想い描く改善策から今後の展望の一端も提示したい。

コメンテータの中西は、第 7 回（1996 年）、第 8 回（2003 年）の宗勢基本調査にかかわった。過疎化、門徒の高齢化などで寺院を取り巻く状況は年を追うごとに厳しさを増していると推察される。第 7 回、第 8 回の調査結果と三者の報告の第 10 回（2015 年）調査結果を比較し、寺院のおかれた状況の変化、護持や運営のあり方の変化および今後の課題についてコメントを行う。

没後 100 年からの井上円了研究に向けて

代表者：井関　大介

円了妖怪学の再検討　井関　大介（東洋大）
進化論受容者としての井上円了　クリントン・ゴダール（東北大）
井上円了から修身教会運動への視座　出野　尚紀（東洋大）
井上円了における「哲学」概念の再考－「哲学宗」を中心にして－　長谷川琢哉（親鸞仏教センター）
司会：長谷川琢哉（親鸞仏教センター）

来年没後 100 年を迎える井上円了（1858-1919）は、越後国の真宗大谷派末寺に生まれ、本山の留学生として東京大学哲学科で学んだ。それ以後、井上円了は仏教の近代化や妖怪学の提唱、哲学館（後の東洋大学）を中心とする教育活動などに邁進したが、その活動は実に多岐にわたり、彼の思想と行動は既存のアカデミズムを大きく外れるところにまで至っている。これまでの先行研究の多くは、井上円了を「哲学者」や「仏教者」としてあつかい、日本哲学史や近代仏教史の展開の内に位置づけてきた。しかしながら、円了に関する基礎的研究の進展、および近年宗教学において盛んになされている「宗教」概念や「仏教」概念の再考論などを通して、円了をとらえるための枠組みそれ自体が問い直されつつある。多領域におよぶ円了の思想と行動を統一的に理解するためには、領域横断的な研究ネットワークの形成が、今まで以上に不可欠なものとなるだろう。

そこで本パネルでは、これまでの円了研究を批判的に引き継ぎながら、没後 100 年以降の円了研究のための新たな研究視座を共同で探ることを試みる。妖怪学、進化論思想、修身教会運動、哲学宗といった、従来のアカデミズムや円了研究においては周辺的に位置づけられてきたいくつかの主題を再考することを通して、井上円了という思想家をあらためて近代思想史の中に位置づけ直すことが本パネルのねらいとなる。以下に各発表の要旨を発表順に示しておく。

【井関大介】井上円了は当時、その妖怪学によって、一般には「妖怪博士」「お化け博士」として有名であった。円了自身の主張によれば、妖怪学は科学・哲学を用いて人々を迷信から解放する学問であり、また、それを通じて哲学的・宗教的真理に到達し得る道でもある。そうした円了の論は、円了研究・妖怪研究いずれにおいても、一応は言及されるのが常とはいえ、それらが実際にどのような理路において主張されているのかなど、本格的に検討されてきたとは言い難い。本発表では妖怪学についての研究史を振り返り、その問題点となされるべき研究の展望について論じる。

【クリントン・ゴダール】明治時代の近代仏教者として広く知られている井上円了は、科学思想とりわけ進化論思想に強い関心を持っていた。進化論を無批判的に受け入れたのではなく、進化論を巡る唯物論や個人主義を批判しながら、独自の進化論を構築しようとしたと言えるだろう。本発表では、日本の進化論受容の思想史的系譜の中で、円了の進化論思想を考察したい。

【出野尚紀】井上円了は、大学経営引退に合わせて、『修身教会要旨』を発表し、今後は徳義と宗教の挽回を目的として各地に修身教会を設置する運動を行うと述べている。しかし、先行研究においては、修身教会運動について十分に論じられてこなかった。そして、「修身」という言葉についても、現在では教科としての意味が強く、円了の意図が十分に伝わっているとはいえない。また、修身教会運動についての視座が円了と周囲とでは異なっていたように思われる。そこで、本発表では、円了が理想とした品性や社会のあり方を資料を読み解いてその実像に迫る。

【長谷川琢哉】井上円了は、その思想と行動の出発点の段階から、つねに「哲学」を主題に据えてきた。仏教改良論や妖怪学といった個々の問題を論じるに際しても、その軸となるのは「哲学」であった。しかしながら、円了の言う「哲学」とはそもそもいかなるものであるのか。とりわけ円了が晩年に構想した一種の新宗教でもある「哲学宗」の事例を見ると、そこでの「哲学」は一般にイメージされたものとは大きくかけ離れている。そこで本発表では、円了の思想と行動の展開の内に「哲学宗」を位置づけ、円了における「哲学」概念がどのような射程をもつのかを考える。

西田幾多郎未公開ノートの研究資料化－「宗教学講義」を中心に－

代表者：浅見　　洋
水損ノートの修復方針と修復作業について　浅見　　洋（石川県西田幾多郎記念哲学館）
修復ノートの翻刻作業方針と実施方法について　中嶋　優太（石川県西田幾多郎記念哲学館）
久松編集「宗教学」と西田直筆ノートとの異同をめぐって　満原　　健（奈良県立大）
忘れられた著者たちとの対決－「宗教学講義ノート」翻刻より－　吉野　斉志（京大）
コメンテータ：秋富　克哉（京都工芸繊維大）
司会：浅見　　洋（石川県西田幾多郎記念哲学館）

(1) 本パネルの要約と意義

2015 年秋に西田幾多郎の後裔から石川県西田幾多郎記念哲学館に寄せられた遺品等の中に、水損した西田直筆のノート 50 冊、大量の考察メモ、レポートなど(「ノート類」と記す）が含まれていた。直筆ノート 50 冊は 2009 年に完結した新版『西田幾多郎全集』(岩波書店）全 24 巻の中には全く収録されていない、未公開の講義ノート、研究ノート、読書ノートと推測することができ、哲学の博物館である石川県西田幾多郎記念哲学館にとっては第一級の史料である。この直筆ノート類の修復、翻刻、研究資料化は、西田哲学の形成と展開に関する研究のみならず、日本哲学史、宗教哲学史、比較思想史などの研究に一石を投じる可能性を秘めている。

本パネルは水損、汚損が激しい 50 冊の「西田幾多郎未公開ノート」の修復、翻刻、研究資料化作業の進捗状況とそこから得られた事業・研究の成果を報告することにある。本事業・研究の最終目標はノートの研究資料化と史料の解析・分析にあるが、本パネルでは資料研究に先立つ修復、翻刻の経過についても詳細に発表・報告する予定である。近現代宗教学・哲学・思想分野において今回のような資料価値の高い西洋紙の汚損、水損文献史料が発見されることは稀である。日本国内には和紙の古文書等については優れた修復技術が受け継がれているが、西洋紙文献の修復作業に関してはほとんど技術的蓄積がない。そのため、今回の修復、翻刻、研究資料化の作業は今後こうした汚損、水損の激しい宗教学・哲学・思想関係の史料が発見された場合には、研究資料化の一つのモデルになり得ると考える。また、本パネルでは資料分析・研究に関する発表では、翻刻、研究資料化作業がかなりの精度に高まっている「宗教学講義ノート」の分析から得られた新しい知見を報告する。翻刻の結果、「宗教学講義ノート」は旧版増補改訂版第十五巻に収録されている久松真一の講義記録「宗教学」の底本であることが確定されている。それ故、本パネル発表での知見とは翻刻された西田の直筆ノートと久松の講義記録の比較研究から得られた成果である。

なお、本研究資料化は博物館事業として修復、一次翻刻を西田幾多郎記念哲学館の運営主体であるかほく市の予算で、二次次翻刻、資料解読は研究作業として科学研究費補助金・基盤 B 一般（17H02264)「西田幾多郎のノート類の研究資料化と哲学形成過程の研究」（代表者：浅見洋）で実施している。二次翻刻とは、一次翻刻によって作成された「読み起こし」文章を磨き上げて翻刻を完成する作業であり、既刊の西田幾多郎全集に準じて段落を整え、明らかな誤記を修正し、外国語の翻訳等の校訂、編集作業をなすなど、原資料の情報を研究資料（テキストデータ）化する作業である。

(2) 発表者の報告内容

【浅見】水損・汚損した大量の貴重資料の発見から修復方針決定までの経緯と、研究資料化を目的とする修復作業上の困難と課題について報告する。

【中嶋】修復された未公開ノートの翻刻の方針および具体的な実施方法について報告し、西田資料の翻刻をめぐる研究資料化の諸課題を検討する。

【満原】久松真一が編集し全集に収められた講義録「宗教学」と今回翻刻した西田直筆のノートとの異同を検討することで、講義録の信頼性およびノートからのみ読み取れる西田の思想について研究発表する。

【吉野】ノートで西田が引用している人物、著作について発表する。とりわけ今では無名であまり注目されてこなかった著者たちに着目し、西田の宗教哲学形成におけるその影響を明らかにする。

石川県西田幾多郎記念哲学館館長であり、基盤 B 一般（17H02264）の代表者である浅見洋が司会を、科研の分担研究者であり、西田哲学会会長である秋富克哉がコメントを行い、フロアも含めた討議を予定している。

宗教者のケア、ケア者の宗教性－川崎市調査から－

代表者：堀江　宗正
都市における宗教施設による地域活動の実態　髙瀬　顕功（大正大）
在日大韓基督教川崎教会の歴史と社会活動の歩み　荻　翔一（東洋大）
ケアとスピリチュアリティー川崎市のケア提供者の調査から－　堀江　宗正（東大）
ケア人材が語るケアの困難・喜び・支え　寺戸　淳子（専修大）
コメンテータ：星野　壮（大正大）
司会：堀江　宗正（東大）

少子高齢化が進み、ケア人材が不足するなか、民間の力の活用がすすんでいる。宗教者もそのようなケア資源として期待されている。宗教研究者には、調査を通して潜在的ケア資源を可視化し、相互交流と変化を促し、その結果をフォローするというアクション・リサーチを遂行することが期待されている。本パネルは、川崎市という多様な援助希求者（高齢者、困窮する女性と子ども、外国人、社会的孤立者、障害者、希死念慮者・自死遺族、嗜癖・依存性者など）を包摂する大都市において行われた、ケアする宗教者と、死と生に関わるケア提供者への調査を突き合わせ、宗教（性）と宗教研究のあり方や位置づけについて考えるものである。

髙瀬顕功は、川崎市内の宗教施設 399 ヵ所を対象とする質問紙調査をもとに、宗教施設が都市型の社会においてどのような地域活動をおこなっているのかを報告する。すでに川崎市内のいくつかの寺院や教会では、檀信徒、信者に対象を限定しない地域活動が提供されている。このようにすでに知られている宗教施設だけでなく、子ども、高齢者、外国人を対象とする多様な活動分野で、川崎市の宗教施設全体が、どの程度インフォーマルな地域資源として利活用されているかに焦点を当て、量的な把握を試みる。また、質問紙には活動の阻害要因を問う項目も設けており、それに対する回答から、ケア提供を可能にする外的要因についても検討する。

荻翔一は、在日大韓基督教川崎教会の設立から現在までの歴史を概説し、その過程で教会が社会活動や社会福祉活動にどのようにコミットし、「宗教」や「エスニック・チャーチ」の枠を超える活動を展開するに至ったか、その歴史的経緯を明らかにする。教会は 1960 年代末以降、在日コリアンに関わる社会活動に参与していった。民族差別撤廃運動や地域社会の多文化共生事業などである。他方、保育園開設を契機として社会福祉法人「青丘社」を設立、在日コリアンのみならず地域にも開かれた「ふれあい館」を建設し、市の委託事業を手がけるようになる。それは今日では、高齢者や障害者を対象とする幅広い福祉事業へと展開している。在日大韓基督教会の宣教理念に加え、中国人やフィリピン人なども居住する川崎という地域や在日コリアンの社会的状況を踏まえ、このような展開がいかにして可能になったのかを明らかにする。

堀江宗正は、川崎市の職員、NPO 等の職員・ボランティア、高齢者関連施設の職員など、幅広いケア提供者を対象としておこなわれたアンケート調査の結果を報告する。ケア提供者がどのような経緯でケアの仕事に従事するようになっていったのか、また彼らの人生観・宗教観・死生観・スピリチュアリティ（「深い価値観」と呼ぶ）がどのようなものであり、ケア行為とどのように結びついているかを明らかにする。それを通して、自らもケアされる経験を持ち、ケアに向かうようになったというパターンと、職務としてケアを遂行する中で自らのケア行為の意味付けを自覚的に深めていったというパターンの二つの類型が析出される。

寺戸淳子は、さらに上記のアンケート調査の対象者で、とくに「死と生に関わるケア」に従事するものを対象とするインタビュー調査について報告する。死と生に関わるケアとは、1）いのちや生活の基盤が脅かされるような困難を抱える人にじかに接し、2）自分自身の経験や技能や資質を活かしながら、3）特定の援助希求者と持続的あるいは定期的に（年に数回以上）関わることがあると自認するものである。このような重い仕事を担っているケア者の「深い価値観」を探り、仕事上の困難を乗り越える際の支えとなっているか、そこに「宗教性」が認められているかどうかを検討する。

以上の発表を承けて、移民に関わる宗教の研究者であり、地域活動を行う宗教者でもある星野壮が、双方の立場を往還しながら、宗教（性）と宗教研究のあり方や位置づけについてコメントを加える。

仏教と近代アジアー教団・教育・教養ー

代表者：何　燕生
日本統治時代の台湾仏教教育における日本の影響　林　佩瑩（輔仁大）
仏教知の近代的創出ー支那内学院を事例としてー　沈　庭（武漢大）
越境する「日本仏教」ー近代中国仏教教育における大谷大学ー　何　燕生（郡山女子大）
「多様な近代」の中の仏教ーインドネシアにおける仏教教団ー　木村　敏明（東北大）
司会：木村　敏明（東北大）

近代アジアにおける仏教の変化・変容は多様な広がりや複合的な要素を持っている。台湾の仏教は 1949 年以後、中国大陸からの影響を受けながら独自の展開を見せているが、それ以前の日本統治時代では植民地政策の一環としての「日本仏教」の影響が中心であったのであり、特殊な「近代化」を辿ってきた。一方、中国大陸の仏教では「僧団仏教」リーダーである太虚を中心に、日本仏教の教育をモデルとして中国仏教の改革がなされようとしたが、その目指すところは「仏化世界」（世界の仏教化）であり、とくに太虚の念頭には西洋近代の物質文明に対する批判があった。太虚と同時代の欧陽漸（竟無）らの「居士仏教」一派は西洋の哲学や思想との比較から仏教の教理を研究し、「近代化」に応答しようとしたが、その狙いはインド仏教への「回帰」にあった。南方の仏教については、これまでタイ、ミャンマー、カンボジア、スリランカなどの伝統的な仏教国の事例が取り上げられることは多いが、インドネシアにおける仏教の事情が知られていない。仏教は近代インドネシアにおいて、イスラームという大きな存在の中でマイノリティ宗教でありながら、独自の「近代化」を遂げ、「仏乗仏教 Buddhayana Buddhism」のような教団まで創出した。したがって、近代アジアの仏教を論じる場合、それぞれのそうした歴史的社会的政治的文脈や複合的な文化的要素を重視する必要があり、それらを一括して「近代仏教」と称し、西洋由来のような分析枠で捉えるには限界があろう。このような観点に立ち、本パネルは教育、教養、教団に焦点を当て、それぞれ台湾、日本、中国大陸およびインドネシアの立場から、「仏教と近代アジア」について、国際的・学際的に考察することを試みる。具体的には以下のような諸課題が議論されることになる。

1．林佩瑩「日本統治時代の台湾仏教教育における日本の影響」では日本人僧侶や政府の管理のもとに、日本曹洞宗による活動、例えば「尸羅会」（伝戒会）、「台湾仏教中学村」、臨済宗妙心寺派による仏教教育プログラムの設定、浄土宗の仏教教育の取り組み、婦人会の設立、留学僧派遣などについて、その歴史的経緯を紹介しながら、台湾の視点から「近代仏教」とは何かを考えようとする。

2．沈庭「仏教知の近代的創出ー支那内学院を事例としてー」では、欧陽漸（竟無）らによる法相唯識学の研究を取り上げる。とくに西洋の学問的影響を受けながら、法相唯識学をもって、「近代化」に応答しようとする取り組みの中で創出された「新しい知識としての仏教」や「教養としての仏教」に着目し、その意義を考える。

3．何燕生「越境する『日本仏教』ー近代中国仏教教育における大谷大学ー」では、1920 年代、大谷大学に在職していた稲葉円成や鈴木大拙らと太虚との交流をふりかえりながら、僧団仏教のリーダーである太虚が中心となって推し進められてきた近代中国仏教教育における大谷大学の存在を明らかにする。とくに僧侶の教育、養成の観点から「近代仏教」を考えようとする。

4．木村敏明「『多様な近代』の中の仏教ーインドネシアにおける仏教教団ー」では、インドネシアにおける仏教教団の形成と変化を、同国独立後の政治的社会的文脈の中に位置付けて考察することを試みる。植民地支配からの独立を果たしたインドネシアは、宗教とりわけ国民の大多数を占めるイスラームと近代国民国家という拮抗する二つの理念の間で時代ごとに微妙なかじ取りをしながら国家建設を進めてきた。インドネシア独特の「仏乗仏教 Buddhayana Buddhism」はまさにそのようなインドネシア近代化の波をまともにかぶる中、仏教側からの応答として誕生した教団であると言える。発表ではこの仏教教団の形成と変化を教育、教養の問題に注目しながら跡づけるとともに、マイノリティ宗教である仏教の側からインドネシアの近代化の問題を逆照射して考察してみたい。

日本宗教研究諸学会連合共催

宗教研究の振興と学会・学会連合の役割－学術会議との対話－

代表者：藤原　聖子

宗教学会の状況－他分野学会と比較して－　藤原　聖子（東大）
インド学仏教学は「社会的要請」にいかに応えるのか　斎藤　　明（国際仏教学大学院大）
神学・キリスト教学の現状と将来にむけて　土井　健司（関西学院大）
日本における道教研究の有効性について　土屋　昌明（専修大）

コメンテータ：井野瀬久美惠（甲南大）
司会：藤原　聖子（東大）

この数年間、政府の科学技術イノベーション戦略の裏で進む、文系諸学や基礎研究の軽視が問題化されている。この状況に対して、個々の大学だけでなく、学会が連携して取り組めることはないだろうか。宗教研究の基盤を維持し、さらなる発展を図るために、関連学会と日本宗教研究諸学会連合は何ができるだろうか。

これまでのところ、「文系の危機」は大学、なかでも国公立大学の文系学部廃止論としてもっぱら議論されている。ところが、他の人文諸学に比べ、宗教研究の特徴の一つは、必ずしも大学ばかりを研究機関とはしておらず、学会の会員にも大学に所属せずに研究している者が少なからず含まれているということである。よって、2015 年の文科相による「6.8 通知」の受け止め方も、宗教研究関連学会のなかでは一様ではない。大学のポストが先細るなかで、宗教研究の諸学会はオルタナティヴな研究の生き延び方を示しているのか、それとも別の形での梃入れを必要としているのか。

こういった根本的な問題を考察する手がかりとして、本パネルは、日本学術会議第一部（人文・社会科学部門）から 2017 年に発出された提言「学術の総合的発展をめざして－人文・社会科学からの提言－」（以下、「2017 提言」と表記）への応答という形で進める。

すなわち、各発表者はそれぞれ日本印度学仏教学会、日本基督教学会、日本道教学会、日本宗教学会（日本宗教研究諸学会連合の運営委員会を構成する諸学会）について、

- 当学会の宗教研究は、2017 提言で掲げられたような社会的要請（狭義の「社会のニーズ」ではなく、「目には見えにくくても、長期的な視野に立って知を継承し、多様性を支え、創造性の基盤を養うという役割を果たす」こと）に応えている／応えることができる
- そのように役割を果たしていることを、対外的にこのように説明・アピールしている
- 当学会の宗教研究は、大型の研究資金、設備をこのようなところで必要としている
- 当学会は、学会の活性化、研究の振興のためにこのような試みを行っている
- 当学会は、若手研究者育成のためにこのような試みを行っている
- 当学会は、女性研究者支援のためにこのような試みを行っている

といった、2017 提言の主要な論点のうちいくつかに絞って、自らの考えるところと学会の状況について報告する。それを通して、必要性は認識されているが手を打てていない課題に関して、学会間の横の連携や学術会議との連携により取り組むことができる部分を抽出していく。

進め方としては、まず第 1 発表者の藤原が、パネルの趣旨、2017 提言と日本宗教学会の特徴を他分野学会と比較しながら説明した後、

第 2 発表者の斎藤氏は、日本印度学仏教学会の取り組みと、斎藤氏自身が手がけてきた翻訳に関するプロジェクト（バウッダコーシャ）を一例として、インド学仏教学は「社会的要請」にいかに応えるか、またその際に直面する課題はなにか、について再考する。

第 3 発表者の土井氏は、日本基督教学会の改革の状況と新しいプロジェクトを紹介した上で、数量化、可視化、結果主義とも言うべきものが力をもつ社会において、神学・キリスト教学という学問の有り様を「説得力」という視点から再検討する。

第 4 発表者の土屋氏は、中国宗教（とくに道教）研究の社会的必要性について、日本あるいは日本人の立場から研究する有効性（宗教文化史的観点、国際交流的観点など）および普遍的で現代的な観点（環境問題の考え方など）から研究する有効性について論じる。

コメンテータには、2017 提言作成において中心的役割を果たされた、日本学術会議前副会長・井野瀬久美惠氏をお招きし、連携の可能性を具体的・現実的に議論する。

井筒「東洋哲学」の地平と宗教研究

代表者：澤井　義次
「意識のゼロ・ポイント」とユング心理学　河東　仁（立教大）
井筒「東洋哲学」と鈴木大拙　岩本　明美（鈴木大拙館）
二つのイスマーイール派研究－井筒俊彦とアンリ・コルバン－　野元　晋（慶大）
近代ユダヤ教正統主義におけるコスモスとアンチコスモス　市川　裕（東大）
コメンテータ・司会：澤井　義次（天理大）

東洋思想･イスラーム哲学研究の世界的碩学であった井筒俊彦は、宗教思想の古典テクストを未来志向的に読み解き、彼独自の「東洋哲学」を意味論的に構想した。本パネルでは、井筒のそうした「東洋哲学」の特徴を明らかにするとともに、現代の宗教研究において、井筒「東洋哲学」の地平がどのような意義をもっているのかを検討したい。

まず河東は、井筒の「意識のゼロ・ポイント」論をユング心理学と比較検討することによって、井筒「東洋哲学」の特徴を明らかにしようとする。ユングは「共時性」の概念を構想する中で、「一なる世界」（ウヌス・ムンドゥス）の用語を重要視した。河東はユングがこの用語をいかに概念規定したのかに注目しながら、「一なる世界」が井筒の「意識のゼロポイント」とどこまで重なり合うのかについて探究する。

次に岩本は、鈴木大拙が禅仏教を中心に東洋思想を西洋に紹介することを使命とし、井筒俊彦は伝統的な東洋思想を共時論的に統合し、「東洋哲学」を構築しようとした点に注目する。井筒は、1967 年からエラノス会議に参加するようになったが、1953 年と 54 年の大拙による禅についての連続講演によって、そこには禅に対する異常なまでの関心と疑問があった。井筒が禅について語るようになったのは、その疑問に応ずるためでもあった。この点では、井筒は大拙の後継者ともみなし得るが、岩本は井筒の「東洋哲学」構想が大拙の功績あるいは思想とどのように関わるのかに注目しながら、禅・大乗仏教テクストに対する井筒の解釈を大拙の見地から検討し、井筒「東洋哲学」の特質を明らかにしようとする。

また野元は、井筒俊彦とアンリ・コルバンのイスマーイール・シーア派研究を取り上げ、両者が実現を目指した哲学的プロジェクト（例えば、井筒の場合は、存在の体験知をパラダイムとする「東洋哲学」）を比較検討する。1960 年代から 70 年代にかけて、主にペルシア語圏をフィールドとするイスラーム神秘思想研究において、日本の井筒とフランスのコルバンは、世界的に指導的な研究者であった。両者は神秘家イブン･アラビーについて影響力の強い著作を残した。コルバンはイブン・アラビーとキリスト教神秘主義およびシーア派との、井筒は道家思想との思想的親和性を大きく取り上げたが、野元はそれぞれの研究が達成したものは大きく異なっていることを明らかにする。

最後に市川は、井筒のアンチコスモス論に注目する。井筒は東洋思想の特徴として、思想の根源にアンチコスモスを置く点で、西欧哲学と好対照をなすという大胆なテーゼを提示した。井筒は東洋思想の主流は、昔から伝統的にアンチコスモス的（存在解体的）立場を取ってきたとして、その典型として、老荘思想やインドのシャンカラの思想とともにイスラーム神秘哲学を挙げた。ユダヤ神秘思想には、イブン･アラビーのイスラーム神秘哲学と同様の構造が認められることはすでに了解されている。それでは、ユダヤ正統主義はどうなっているのか。ユダヤ教正統主義は、律法を基盤とする規範的構造をもつが、他方で、19 世紀リトアニアの正統主義の思想は、カバラー神秘主義を受容したことも知られている。ノモスは、コスモスの安定的な秩序を支えているはずであるとすれば、ユダヤ教はアンチコスモスをどのように理解したのか。市川はこうした点について考察をおこなう。

以上、4 名の研究発表に対して、まず、コメンテータの澤井義次がコメントをおこなう。澤井のコメントに対して、各パネリストが応答し、各研究発表の内容に関する理解を深める。そのうえで、このパネルに参加したすべての研究者も交えて、井筒「東洋哲学」をめぐる討議をおこなう。このように本パネルは、井筒「東洋哲学」を現代の宗教研究の一つとして捉えて、井筒「東洋哲学」に関する理論的展開を目指す一つの試みである。

開催校特別企画②

人口減少時代における地域と寺院のあり方研究

代表者：木越　　康
過疎地域と寺院のあり方に関する報告－揖斐川町春日を中心に－　　藤元　雅文（大谷大）
「過疎と寺院」問題をどう捉えるか－モビリティ論の視点から－　　徳田　　剛（大谷大）
過疎地域における寺檀関係の持続可能性　　中條　曉仁（静岡大）
コメンテータ：櫻井　義秀（北大）
司会：木越　　康（大谷大）

本パネルは、人口減少時代の地域と寺院のあり方について、これまで積み重ねられてきた研究成果を踏まえ、現在どのような課題や問題への視座が存在し、またどのような研究の方向性が必要であるのかを考察する基盤となるような研究発表の場となることを目的としている。

本パネルの研究成果の土台となっているのは、大谷大学･真宗総合研究所の特定研究（研究代表者:大谷大学長）「新しい時代における寺院のあり方研究」である。近年、全国的な少子高齢化の流れや、人口の都市部への集中と地方における過疎化の進展、更には地域構成員相互における関係性の稀薄化等の深刻な諸動向のもとで、多くの地域社会においてはこれまで築いてきたコミュニティを維持することが難しい状況に立ち至っている。そうした状況のもとで、既に多くの地域においては、従来、地域社会と密接に関わりつつ存在していた寺院の存続そのものが危ぶまれている深刻な状況にある。しかし、同時に各地域が上述のような問題点を抱えている現代の日本においては、これらの諸問題に対応し、より良い社会を築いていく核となるべき存在、就中、歴史的にそうした役割を実際に担ってきた寺院に寄せられる期待が、改めて高まってきているとも言うことができよう。こうした現状を踏まえつつ、特定研究が目指している所は、様々な問題を抱える現代社会における寺院の果たし得る役割について、寺院のための研究を越えて、地域によりそい、地域のために寺院に何ができるのかという点を含め、地域と寺院のあり方についての調査・研究活動をおこなうことである。

本パネルでは、その研究成果報告を一つの柱としながら、研究班からは、パネル代表者の木越康、報告者の藤元雅文、徳田剛（以上、大谷大学）が参加し、さらに過疎地域研究および過疎地域における寺院の存立基盤に関する研究を専門とする研究者として中條曉仁（静岡大学）を報告者として加えている。また、コメンテータとして当該研究テーマの第一人者である櫻井義秀（北海道大学）を迎えている。

パネルの進め方は、まず代表者の木越がパネル発表の趣旨を説明し、そののち各報告者が具体的な研究発表を行う形となる。報告者の内容は、以下のとおりである。

発表 1（藤元）：過疎地域と寺院のあり方に関する報告
－揖斐川町春日を中心に－

本発表では、2017 年度から開始した大谷大学真宗総合研究所における過疎地域と寺院のあり方に関する研究概要および岐阜県揖斐川町春日地区における調査の進捗状況を中心に報告する。更に、上記の調査における課題の整理と今後の調査研究についても言及したい。

発表 2（徳田）:「過疎と寺院」問題をどう捉えるか
－モビリティ論の視点から－

国内外での人口移動の常態化に伴い、過疎地域の寺院の多くが存続の危機に瀕している。本報告では、門信徒の移住･移動を前提として寺院運営のあり方を検討することの必要性を呈示した上で今後の研究課題を確認する。

発表 3（中條）：過疎地域における寺檀関係の持続可能性

本報告は、過疎地域に所在する寺院の寺檀関係に注目し、その持続可能性を当該地域から転出した檀家の子弟（離村者）の動向から検討するものである。定住型地域社会の上に成り立ってきた寺檀関係の新たな局面を、人口流出と家族の空間的分散が進む過疎地域から明らかにしたい。

以上、3 人の発表ののち、櫻井がこれまでの調査や研究成果を踏まえ、人口減少社会における地域と寺院に関する報告者の内容について、コメントする。その後、議論をフロアにも開放して、活発な質疑を展開する予定である。

近代の仏教思想と日本主義－親鸞・禅・日蓮－

代表者：名和　達宣
「親鸞と日本主義」再考－曽我量深の波紋を通して－　名和　達宣（真宗大谷派教学研究所）
親鸞とマルクス主義－佐野学の転向問題を中心に－　近藤俊太郎（龍大）
禅・華厳と日本主義－市川白弦と紀平正美の比較分析を通して－　飯島　孝良（親鸞仏教センター）
「日蓮主義と日本主義」再考－田中智学の問いを通して－　ユリア・ブレニナ（阪大）
コメンテータ：石井　公成（駒大）
司会：名和　達宣（真宗大谷派教学研究所）

近代の仏教思想の大勢が日本主義と結びつくことは、すでに多くの研究者により指摘されてきた。近年では、中島岳志が『親鸞と日本主義』（新潮社、2017 年）において、浄土教それ自体に国体論との連続性があるという問題を提起した。本パネルでは、その問題提起を重視しながらも、仏教思想それ自体に日本主義の淵源を探るのではなく、変容していく時代状況にそれぞれの思想家が即応し、仏教をいかに再編していったのかという過程の探究を目指す。

こうした視点に立てば、時代状況の全体が日本主義に回収されていく中で、個々の思想家がその時流といかに対峙しながら仏教を再構築していったのかを明らかにすることができるだろう。また、そこからは、日本主義や国体といった戦時下の支配的イデオロギーにも再解釈を加えていくさまや、単純に等号では結べない仏教思想の領野を確保すべく取り組んだ苦闘の軌跡が浮かび上がってくるのではないだろうか。

本パネルでは、この問題を、特に親鸞・禅・日蓮の三つを軸に考えたい。各発表者は、これらの思想（教学）と日本主義との直接的な関連よりも、まずはそれぞれの重なる領域や、京都学派やマルクス主義など、同時代思潮との交流する場所をたずねていく。このような「回り道」を通して、個々の思想的格闘に光を当てつつ仏教思想と日本主義との関わりを再考することが、本パネルの目的である。各発表の要旨は以下の通り。

【名和達宣】中島岳志による「親鸞と日本主義」という問題提起は、近代親鸞教学を代表する人物をも射程に入れたものであっただけに、大きな反響を呼んだ。本発表では、その中でも曽我量深に焦点を当て、国民精神文化研究所の中心的存在であった紀平正美や田辺元をはじめとする京都学派の哲学者に与えた影響をたずねる。現代にまで及ぶその波紋の軌跡を掘り起こすことで、中島の提示する「親鸞思想そのものに内在する危険性」という命題の再考を試みたい。

【近藤俊太郎】親鸞思想はマルクス主義を媒介することで、どのような新たな意味を帯びていったのだろうか。本発表では、佐野学を中心的に取り上げ、彼が水平運動に積極的に関与し、宗教批判から転向を経由して日本主義との関係を構築していく中に独自の親鸞理解を読み取りたい。そして、その親鸞理解の変容過程を追跡し、日本主義と架橋可能な契機がどう立ち現れてくるのかを考えてみたい。

【飯島孝良】禅学者の市川白弦は、鈴木大拙への厳しい批判を展開する B･ヴィクトリアの論述などでその名を知られるものの、むしろ着目すべきは、国体を法界縁起的な論理で裏付けたとされてきた西田哲学や大拙思想を批判的に継承した点である。これは、体制寄りの日本主義的立場をとっていた紀平正美が、法界縁起的な世界観がデモクラシーにつながると《危険視》した点と（評価は真逆ながら）認識が重なるものである。市川と紀平の比較分析を通して、特に市川の「空－無政府－共同体論」と一休論にある特質、そして「日本」に対する看方を探る。

【ユリア・ブレニナ】田中智学の日蓮主義は日本による世界統一という国家主義的なプランを提示し、戦前の日本主義者、とりわけ超国家主義やテロリズムの思想を持つ軍人や右翼活動家を感化したことでよく知られている。しかし、彼の仏教的な日本国体論においては、仏教に対して国家の位置が大きいとはいえ、完全に国家の中に吸収されることはなく、国家はいわば「宗教的装置」として構想される。本発表では、仏教に備わった超越性と普遍性に対する問いと、国家の絶対的価値に対する問い、その矛盾に揺れていた智学を中心に、日蓮主義を再考してみたい。

なお、コメンテータには、仏教思想と国家主義・マルクス主義との関係について広く深い知見を持たれ、近代仏教における華厳教学や聖徳太子像の問題等を論じてこられた石井公成氏に就いていただく。

身心変容技法と霊的暴力－負の感情処理のワザの考究－

代表者：鎌田　東二
身心変容技法と霊的暴力の問題－オウム真理教事件を踏まえて－　鎌田　東二（上智大）
キリスト教における身心変容技法と霊的暴力　鶴岡　賀雄（南山宗教文化研究所）
テーラワーダ仏教における身心変容技法と霊的暴力　井上ウィマラ（高野山大）
チベット密教における身心変容技法と霊的暴力　永澤　哲（京都文教大）
近代日本の宗教における身心変容技法と霊的暴力　島薗　進（上智大）
司会：鎌田　東二（上智大）

「身心変容技法」とは、「身体と心の状態を当事者にとってよりよいと考えられる理想的な状態に切り替え変容・転換させる諸技法」を指す。しかし、そうした理想や理念とは裏腹に、それが「霊的暴力」（超越的な世界観に裏付けられた破壊性）を引き起こすことがしばしばある。オウム真理教事件は、そうした「身心変容技法」の修行がもたらした霊的暴力の典型的な事件と捉えることができる。

現在、「身心の荒廃」が様々な局面で社会問題となっている時代状況下、その負の連鎖から抜け出ていくための宗教的リソースやワザ（技術と知恵）として「身心変容技法」を正当に位置づけるためにも、その負の局面の危険性や問題性を明らかにしつつ、同時に、そのプラグマティックな応用可能性の道を探ることは喫緊の課題であり宗教研究の責務である。

1995 年に起きたオウム真理教事件が問いかけた問題性や事件性は、身心変容技法研究の重要な事例研究となり、それは、宗教学的な諸問題、たとえば、教祖論、弟子論、修行論、宗教教育論、宗教教団論、宗教象徴論などとも密接に関連する。また、諸種の身心変容技法によってもたらされる変性意識状態・神秘体験（宗教体験）・回心、修行の経験が引き起こす精神障害や魔境や暴力を比較宗教学的な観点から検証していくことにもつながる。その際、「身心変容（transformation of body & mind）」および「霊的暴力（spiritual violence）」「霊的虐待（spiritual abuse）」の概念を明確にするとともに、そこに共通する構造や問題点を取り出し、「負の顕われ」として顕在化する局面を考察する必要がある。伝統的には、禅修行における「魔境」の問題、大本教事件における「鎮魂帰神法」の問題点、オウム真理教の特異な修行法や儀礼である「水中クンバカ」や「土中サマディ」や「血のイニシエーション」などがもたらす「霊的虐待」と坂本弁護士殺害事件や地下鉄サリン事件との関係、瞑想によって引き起こされることのある「クンダリニー症候群（Kundalini syndrome）」、いわゆる「カルト教団」とされてきた人民寺院や太陽寺院やヘヴンズ・ゲートなどの「集団自殺」、チャールズ・マンソンによる殺人事件など、修行や薬物使用などによる「身心変容」とともに顕在化した諸種の「霊的暴力」の事例を念頭に置きつつ、キリスト教（鶴岡賀雄）、テーラワーダ仏教（井上ウィマラ）、チベット仏教（永澤哲）、神道（鎌田東二・島薗進）、近現代の日本宗教（島薗進）の諸事例を検証しつつ、比較検討し討議する。

代表者・司会者の鎌田東二は、「身心変容技法」の概念と全体像と問題点を示しながら、宗教弾圧を受けた大本教の鎮魂帰神の行法やオウム真理教の身心変容技法と霊的暴力のありようを比較検討し問題点を浮かび上がらせる。

続いて、鶴岡賀雄は、十字架のヨハネの「魂の暗夜」の教説とキリスト教世界における悪魔体験記述を題材にその現代的意義を探る。

続いて、井上ウィマラはマインドフルネスが体系化される過程で起こった集団自殺事件に伴う戒律の制定を踏まえ、観の汚染の視点から霊的暴力の抑止と身心変容技法の在り方について考察する。

続いて、永澤哲はチベット仏教における「魔」の概念の重層性と、瞑想における変性意識状態の位置付けについて考察する。

続いて、島薗進は「日本近現代宗教における身心変容技法と霊的暴力」について、学校や軍隊における霊的な観念（神聖天皇・国体）にそった心身の規律づけがもたらした霊的暴力とその戦後の継承について考察する。

これらの問題提起を受けて、全体を整理しつつ問題点をクリアーにし総合討論していく。

東西を往還する日本仏教－鈴木大拙とその周辺の思想交流から－

代表者：守屋　友江

Eastern Buddhist 第 1 期の購読者リストについて　日沖　直子（南山宗教文化研究所）

千崎如幻の米国禅布教における特質－浮遊禅堂と東漸禅窟の実態－　末村　正代（関西大）

鈴木大拙と岡倉覚三－英語圏に伝えられた禅と日本文化－　岡本　佳子（国際基督教大）

アメリカ人に説く禅と真宗－鈴木大拙の在米講演に関する考察－　守屋　友江（阪南大）

コメンテータ・司会：吉永　進一（舞鶴高専）

パネルの要約と意義

発表者とコメンテータは、日本仏教のグローバル化について、19 世紀末から 20 世紀前半という長期にわたって活躍した鈴木大拙（1870-1966）を手がかりに、鈴木大拙研究会（代表・守屋友江、科学研究費補助金基盤研究（C）「日米の新資料による日本仏教グローバル化過程の研究－鈴木大拙を事例として」）のメンバーとして、2017 年度より鈴木関連の一次史料を用いて共同研究を行っている。

本パネルのメンバーはこれまで、神智学研究会（代表・安藤礼二、科学研究費補助金基盤研究（B）「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究」）と共催した国際ワークショップ「アジア・仏教・神智学」（2017 年 12 月）において研究成果を発表した。そこでの議論から、鈴木が発信した宗教思想だけでなく、東西往還という双方向的な観点から、日本仏教のグローバル化を捉える必要性を認識するに至った。

先行研究は鈴木個人の宗教思想の一側面を取りあげることが多く、また日本仏教といえば日本国内に限定した研究になりがちだが、本パネルでは、いわば近代宗教史を自ら体験した生き証人といえる鈴木の、様々な側面を明らかにする。すなわち、海外へ向けて禅や日本文化を紹介した著述がどう受容されてきたのか、その変遷も含めた過程に焦点を当てるほか、近代史と現代史に分断するのではなく、二つの大戦を経て次第に推移する「日本」や「仏教」イメージを捉える。また異文化接触に伴って生じた誤解を分析し、欧米における D. T. Suzuki や彼の「仏教」への評価を明らかにし、さらに海外の仏教徒／仏教賛同者からの刺激が鈴木の宗教思想に与えた影響をも考察に入れている。

このようにパネル発表によって、鈴木を通してみた日本仏教のグローバル化をより複眼的かつ実証的に把握することをめざし、東西の双方向的な宗教思想の交流をトランスナショナルな視点から明らかにしようとするところに、本パネルの意義がある。

発表者と報告内容

発表者は日沖直子、末村正代、岡本佳子、守屋友江の順で、コメンテータは吉永進一とする。

日沖直子は、鈴木の創設になる松ヶ岡文庫所蔵の *The Eastern Buddhist* 誌購読者の資料をもとに、鈴木が妻のビアトリスと主宰し、大谷大学の支援のもと刊行された英文仏教雑誌 *The Eastern Buddhist* の読者層、および鈴木夫妻と海外仏教シンパとの交流を 1920 年代後半から 1930 年代に焦点を当てて考察する。

末村正代は、鈴木と円覚寺の同門で長く親交のあった千崎如幻（1876-1958）のアメリカ禅布教の実態と、在米時の鈴木との交流を考察する。とくに 1920 年代に設立された二つの禅堂の活動に着目しながら、千崎が白人布教に対していかなる展望をもち、鈴木とどのような協力関係を築いていたのかを明らかにすることを試みる。

岡本佳子は、美術史家であり在家仏教徒であった岡倉覚三（天心 1863-1913）との比較を試みる。『東洋の理想』『茶の本』などの著述をとおして日本美術や禅を英語圏に伝えた岡倉の思想と活動を参照しながら、鈴木の文化発信の歴史的意義を考察する。

守屋友江は、1949 年の東西哲学者会議以降、鈴木が全米各地の大学や現地日系仏教寺院で行ったアメリカ人向けの講演について考察する。とくに、大学では禅、日系寺院では浄土真宗を中心に講義したという違いがあり、現地の聴衆の受け止めも様々であったことの意義について取りあげる。

コメンテータは、これまでに鈴木大拙に関連する松ヶ岡文庫所蔵の重要な資料を発掘し、それらに基づく研究を数多く発表してきた吉永進一が行う。

以上のように、本パネルは共同研究によって、複眼的な視座から鈴木大拙と彼を取りまく人々とのトランスナショナルな思想交流を検討することで、従来の鈴木大拙研究と近代日本仏教史研究に新たな知見と研究枠組みを提供することをめざしている。

現代世界における「宗教性」の変容－日本と中国の事例から－

代表者：長谷千代子

現代世界における「宗教性」の変容－研究視点と展望－　長谷千代子（九大）
日本の公的慰霊における脱色された宗教性とその担い手　西村　明（東大）
久高島における巡礼ツーリストとヴァナキュラーな宗教性　門田　岳久（立教大）
現代中国における儒教と「宗教性」　川口　幸大（東北大）
現代中国の「生態文化」言説とチベット人の「環境主義」的実践　別所　裕介（駒大）

司会：別所　裕介（駒大）

本パネルは、現代世界において宗教をめぐる実践とカテゴリーがどのように変容しつつあるかを、日本と中国の文化人類学的な事例研究を通じて議論するものである。題目にある「宗教性」という語は、ここでは「どのような実践が宗教的で、なおかつそれを『宗教』と認識するかどうかについて、実践の当事者たちや研究者のあいだで見解が分かれる未決定性の場」というやや特異な意味で用いている。

1990 年代以降顕著となった宗教概念批判により、「宗教」という語は安易に使いづらいものとなったが、この変化には、現代世界の状況そのものの変化も大きな意味を持っている。宗教概念批判ではこの西欧起源の概念が非西欧地域になじまない点もよく批判されるが、少なくとも日本や中国では「宗教」という語はすでに日常語となっている。そして流通・交通網、観光業、インターネットなどの発達により、たとえばパワースポット巡礼や宗教思想に近接した環境保護主義のように、一見世俗的・個人的な日常生活に宗教的要素が取り入れられ、一気に流行するような現象も珍しくない。「宗教」のイメージも「人生の究極的価値」から「時代遅れの迷信」までさまざまだが、人々はそれをも踏まえて自らの実践とそのカテゴリー（宗教と見なすか、別のものと見なすか）を模索している。

この状況においては、研究者側が「宗教とは何か」を一方的に決めてから研究するのではなく、実践の当事者がなんのためにどのような実践を行ない、それを「宗教（あるいは具体的な○○教）」と見なすかどうかを問い、研究者側の「宗教」概念と照らし合わせてみることも大事であろう。「宗教」をめぐる実践もカテゴリー判断も未決定な領域においてなにが試行錯誤されているかをミクロに検証することで、現在および将来「宗教」概念が持ちうる意味と価値、他概念との相対的位置付けが見えてくると考える。

今回は事例として日本と中国を取り上げる。共産主義中国は「宗教」に対して基本的には敵対的であったが、2000 年代に入って宗教の社会的効用を公的に認める傾向が現われ、個人的にも宗教に関心を持つ人々が増えているとされる。一方日本は特に戦後、政教分離を徹底しようとする方向にあり、80 年代には新宗教ブームもあったが、90 年代のオウム真理教事件以来、宗教という語の一般的イメージは悪化しているように思われる。こうした状況を踏まえ、異なる立場の当事者の事例を 4 人の研究者に発表してもらう。

冒頭、長谷が上記のような研究視点に至った経緯と、本パネルの趣旨を説明する。続く西村氏の発表は、日本の公的慰霊の場において、特定の宗教色を出すことなく、慰霊にふさわしい宗教的荘厳さを演出するために、芸術家や運営者がどのような工夫を行ない、公的慰霊の型が生み出されつつあるかを取り上げる。門田氏は久高島を訪れるスピリチュアルな旅行者の事例を取り上げ、傍目にはある種の宗教性を帯びて見える彼らの実践と、それを「宗教」とは認めまいとする彼らの言説の分析を通して、その状況を射程に捉えるための研究視点について論じる。中国についてはまず川口氏が中国の宗教状況を概観し、近年儒教を敢えて「宗教」として再評価する知識人が一部に現れたことの意味を考察する。彼らの言説実践は一般の人々の儒教道徳観や祖先祭祀の実践とは乖離しており、研究者が「儒教」を論じる際の困難が浮き彫りとなる。最後に別所氏はチベットにおいて人々がこれまで主に仏教的実践として行ってきたことが、環境保護の思想や実践とシンクロすることによって、「環境保全」ないし「生態文化」というカテゴリーに移し替えられていく状況を論じる。

こうした事例を踏まえ、日中両国における「宗教」イメージおよびその利用法（排除も含めて）の異同とその原因、また日中両国の例に限定せず、そうした状況を適切に捉えるための研究視点や手法などについて討論したい。

戦後日本の宗教者平和運動のトランスナショナル・ヒストリー

代表者：大谷　栄一
戦後の日中友好運動と中濃教篤－日中仏教交流懇談会を中心に－　坂井田夕起子（愛知大）
世界連邦主義と大本－前進と捩じれの平和運動－　永岡　崇（阪大）
核廃絶と日本宗教－ICAN と SGI・WCRP の関係を中心に－　塚田　穂高（上越教育大）
戦争とキリスト教－肯定・協力の構造と抵抗のネットワーク－　一色　哲（帝京科学大）
コメンテータ・司会：大谷　栄一（佛教大）

（1）本パネルの位置づけ

本パネルは、2016 年 4 月より実施している共同研究「戦後日本の宗教者平和運動のトランスナショナル・ヒストリー研究」（代表者：大谷、科学研究費補助金・基盤研究（B）、2016～18 年度）の最終報告である。

本共同研究の目的は、第二次世界大戦後の日本の宗教者による平和運動（宗教者平和運動）の歴史をトランスナショナルな視点から実証的に解明することである。現在、一次資料を探索・整理するとともに、資料調査、インタビュー調査、現地調査等によって調査・研究を進めている。

（2）本パネルの目的

本パネルの目的は、「戦後日本の宗教者平和運動研究」をトランスナショナルな視点から捉え直し、当該研究領域の更新を図ることである。今回のパネルでは、日中友好運動、ICAN と SGI、WCRP 日本委員会、大本と世界連邦運動を取り上げる。これらの対象は先行研究では十分に検討されているとはいえず、その実態を報告し、問題提起するとともに、当該研究領域の課題と展望を示したい。

（3）発表者の報告概要

4 名の発表者の報告概要は、以下の通りである。

坂井田報告：戦後、東アジアの冷戦構造が深まる中で、国交のない日本と中国の間の「過去の戦争の後始末」は、日中友好運動として進められることになった。具体的には、在留邦人の帰国問題、在日華僑の帰国問題、そして中国人強制連行犠牲者の遺骨送還運動が、「過去の戦争を反省する」平和のための日中友好運動として進められたのである。

この平和運動において主導的な役割を果たした多くの仏教者の一人に中濃教篤がいる。本報告は、中濃教篤の活動を中心に、1950 年代から 60 年代のトランスナショナルな平和運動としての日中友好運動を検討したい。

永岡報告：戦後日本の宗教者による平和運動を考えるうえで、さまざまな宗教集団がかかわった世界連邦運動の理解は欠かせない。そこには宗教運動と平和運動の共通性や差異を検証するためのさまざまな論点が凝縮されていると考えられるのである。

本報告では、積極的に世界連邦運動に参加した大本を取り上げ、アジア・太平洋戦争後から 1950 年代にいたる運動展開を政治的・社会的文脈に位置づけるとともに、戦前の人類愛善運動および昭和神聖運動からの継承と断絶、またそれがもたらす葛藤を考察することで、近代における宗教者平和運動の歴史的性格を浮き彫りにすることをめざす。

塚田報告：2017 年に NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）」のノーベル平和賞受賞が決まった際に、SGI（創価学会インタナショナル）と WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会はそれぞれいち早く声明・談話を出した。SGI は、ICAN の発足以来の「国際パートナー」であることを強調し、授賞式には SGI 役員も出席した。WCRP は、国連の核兵器禁止条約交渉に先立って ICAN と『提言ハンドブック』を発表するなど連携を続けてきた。本報告では、戦後日本の核廃絶運動と宗教団体との関わりを概観し、その流れのなかに ICAN と SGI および WCRP との関わりを位置づけ、そうした非宗教的団体との連携において自らの宗教性や運動特性がどのように反映されているかを検討する。

一色報告：本報告では、まず、戦争・平和へのキリスト教の関わりについて以下の 4 つに類型化する。①寄り添う、②支配する、③抑圧する、④抵抗する。そして、それらを基に、戦争とキリスト教の歴史的関係を植民地支配や軍事支配も含めて吟味し、その構造を明らかにしたい。その上で、戦後の「キリスト者平和の会」等を事例に、マイノリティであるキリスト教が平和運動に参加する際の諸問題についてとりあげる。そして、それら「抵抗のネットワーク」を地域や他宗教、他団体（政党・労組等）との連携の観点で議論したいと思っている。

技術社会と宗教－人工知能の実装化が持つ宗教的意義について－

代表者：木村　武史

人工知能の実装化と宗教学の課題　木村　武史（筑波大）
人工知能の「尊厳」の考察　小原　克博（同志社大）
米国電気電子学会「自律・知能システムの古典倫理」と仏教倫理　師　茂樹（花園大）
人工知能の身体観に関わる諸問題　永原　順子（阪大）
人工知能と生死（せいし）観　濱田　陽（帝京大）
司会：木村　武史（筑波大）

現代技術革新の中で人工知能は社会、経済、医療など様々な分野への影響が論じられている。人工知能開発の宗教への影響についてはまだ十分には論じられていないが、人工知能と宗教の関係は実は複雑である。特に人工知能の機能だけではなく、人工知能とロボット技術とが融合して人間社会に実装化される場合、人工知能が社会化されることになり、人間社会の構造に変容が起きることが想定される。宗教が人間観や世界観と密接に結びついているならば、一方で、人工知能概念の成立と技術的開発の背景にどのような宗教的次元が認められるのかを考察する必要があり、他方で、具体的に開発され実装化されつつある人工知能が諸宗教に与える影響と人工知能そのものに見出される宗教的意義を考察する必要もある。本パネルでは、このような問題関心のもと、現代技術社会における宗教の諸相について取り上げてみたい。

・パネル代表の木村は趣旨説明と人工知能をめぐる宗教学的研究の諸課題の射程についての問題提議を行う。

・小原の発表概要は以下の通りである。海外では人工知能やロボットに「権利」や「義務」（ルール）を付与すべきという議論がある。人工的に作り出されたもの（人工知能・ロボット）に対する権利概念を、人間以外の動物に対する権利概念（動物の生存権等）と比較することによって、その特質を明らかにする。キリスト教を背景とする西洋世界では、神の創造に由来する超越的な「尊厳」概念が存在したが、人間による創造物に、どのような「尊厳」を認めることができるのだろうか。グノーシス思想、終末論も手がかりとする。

・師の発表概要は以下の通りである。電気通信関連の標準化で有名な IEEE は、自律システム（≒ロボット）や知能システム（≒人工知能）（A/IS）の開発等における倫理に関する標準化に取り組んでいる。現在 Ver. 2 が公開されている Ethically Aligned Design（EAD）では、“Classical Ethics in A/IS” という章が設けられ、西洋倫理学に加え仏教や儒教、神道、Ubuntu などの倫理がとりあげられている。本発表では仏教倫理に注目しつつ EAD を検討したい。

・永原の発表概要は以下の通りである。からくり人形や文楽人形は、外見や動作を人間に似せようとする。その一方で、能の役者は、抽象化かつ制限された動作によって人間から遠ざかるように思える。それらに対して我々は畏怖し、魅了され、様々な伝承を生み出し、人間とは異なる魂の存在を感ずることもある。また、実体を伴わざる未知の存在が、神格化や妖怪化を経て畏怖の対象となることも少なくない。これら“既存”の異界と人間との関わりとを論ずる視点は、人工知能と人間との関わりの解明に何を寄与できるのか。身体観を中心に検討したい。

・濱田の発表概要は以下の通りである。アルゴリズムとデータに依拠する人工知能技術は果たして新たな生死観の潮流を生み出し、伝統宗教の生死観に対して近代の生物学・医学が与えてきたほどの大きなインパクトを及ぼす可能性があるのか。「新テクノロジー宗教」の台頭が急速にヒューマニズムと伝統宗教をゆるがし、人間存在の基盤を突き崩しつつあるとするユヴァル・ノア・ハラリ『ホモデウス』（2015）の問題提起等を参照しつつ、人工知能技術が宗教文化的な生死観にいかなる影響を与え得るのか、人工知能と生死観をめぐる問題圏について検討したい。

・最後にフロアを含めたディスカッションを行う。

世界 8 か国における共通の宗教性と宗教度

代表者：川端　　亮
川端　　亮（阪大）
渡辺　光一（関東学院大）
樫尾　直樹（慶大）
弓山　達也（東京工業大）
星川　啓慈（大正大）
司会：川端　　亮（阪大）

調査の概要と発見
宗教間競争と信教の自由
普遍宗教と地球倫理
宗教的であることと幸福であること
宗教と戦争

本パネルは、科研費基盤研究（A)「生命主義と普遍宗教性による多元主義の展開－国際データによる理論と実証の接合－」（研究代表者：星川啓慈、課題番号 25244002）の成果についての発表である。この科研では、2015 年、16 年、17 年の 3 度にわたってインド、トルコ、日本、アメリカ、イタリア、台湾、タイ、ロシアの 8 カ国でインターネット調査を実施した。

第 1 報告（川端）では、宗教の、特に信念の側面についてのこの意識調査の概要について説明し、国にかかわらず、8 カ国共通の要素によって構成される一次元の宗教度（宗教尺度）が構成可能という発見について述べる。

第 2 報告（渡辺）は、宗教度の意義について報告する。宗教的信念の難易度を決める共通 1 次元尺度（宗教度）は、合理的選択理論の観点から見れば、個人的合理性を最大化する選択のための比較・探索の負担を減少させ、その意味で市場における普遍的価値指標である価格に相当する。すると、信仰者が自己の宗教的能力とその他の価値観に応じて宗教的効用を最大化する選択（堅信や棄教や改宗を含む）することを容易にし、真の信教の自由のための基盤となる。宗教度は宗教間の共約可能性をもたらすので、各教団が信徒獲得のために切磋琢磨する適切な宗教間競争を可能にし、それは社会全体における宗教の品質を高め、宗教間対話以上に健全で有益である。

第 3 報告（樫尾）は、宗教度と普遍宗教性／地球倫理性との関係性について扱う。従来の主要な宗教学・宗教社会学理論を踏まえながら、現代人の宗教意識の一次元的構造生成の社会文化的諸要因のいくつかの仮説を提起し、その中でも特に、いわゆるグローバル化における文化変容との関係性に留意しながら「宗教意識は被文化拘束性から脱被文化拘束性へと転回している」という命題について考察することを通して、現代の一次元構造的な宗教意識が、ある種の「普遍宗教（性）」を示しているのか、さらにはそれが 21 世紀の普遍的な地球倫理、公共性の基礎を提供することができるのか否かについて考えてみたい。

第 4 報告（弓山）は宗教度と幸福との関連に注目する。宗教が精神的健康に影響を与えること、特に主観的幸福感やウェルビーイングと密接な関係にあることは、つとに指摘されてきた。今回の調査でも宗教的信念を持つ（宗教度が高い）ほど幸福であることが解明された。ただ同時に宗教的な（宗教度が高い）ほど自己愛性が高いことも明らかになった。さらに自己愛であるほど幸福であることも示唆された。第 4 報告では、この宗教的であること、幸福であること、自己愛であることとの関係を考察するとともに、嬉しい体験という充実感、ボランティア体験といった社会活動、美術館に行ったりクラシック音楽を聞いたりする文化的行動との関連も探る。

第 5 報告（星川）は、宗教と戦争の関係について検討する。今回の調査結果で「宗教と戦争」に関連して得られた命題は、以下の 7 つである。(1) 宗教度が高いほど、宗教の正しさにも関心を持つ。(2) 宗教度が高いほど、宗教の正しさに断定的になる。(3) 宗教度が高いほど、自分の宗教が一番正しいと考える。(4) 宗教度が高いほど、全ての宗教の正しさは等しいと考える。(5) 宗教度が高いほど、寛容性と非寛容性の両方が増加し、曖昧さが減少する。(6) 宗教度が高いほど宗教的愛国心は増加する。(7) 宗教度が高いほど、世界の平和を〈神〉に祈るようになる。これらは相互に連関しているが、とりわけ (3) と (4) は興味深い。なぜなら、両者は両立し難いように思われるからだ。第 5 報告では、「宗教的専心主義」も加味しながら、この矛盾をいかに「解釈」すべきかも考察したい。

以上の報告を通して、8 カ国共通の宗教度を用いた研究の意義について、議論したい。

大学内宗教者養成の歴史・制度・実態に関する調査報告

代表者：江島　尚俊
統計調査からみる戦後日本の宗教系大学　江島　尚俊（田園調布学園大）
國學院大學・皇學館大学における神職養成について　藤本　頼生（國學院大）
大学はいかに僧侶を養成するのかー仏教系大学の養成とその類型ー　武井　順介（立正大）
キリスト教系大学における聖職者養成ー制度比較にもとづく分析ー　齋藤　崇徳（大学改革支援・学位授与機構）
コメンテータ：原　誠（同志社大）
司会：江島　尚俊（田園調布学園大）

2011 年 4 月に「大学と宗教」研究会（於大正大学綜合仏教研究所）が発足して以来、我々は、大学内における「宗教の研究」と「宗教者の教育」に関して調査・研究を進めてきた。本パネルはこれまでの成果の内、現代日本における大学内宗教者養成に関して報告を行っていく。

そもそも考えるに、大学内で宗教者が養成されている事実は、社会的に広く認知されている。しかし、そこでの歴史や実態についてはほとんど知られることはなかった。大学内における宗教者養成は、どのような理念で、どのように実施されているのか。本パネルにおいては、神道系・仏教系・キリスト教系の諸大学の中で宗教者養成課程を有している大学に焦点を当てて、養成に関する①理念、②歴史、③教団と大学の関係性、④現行のカリキュラム、等について報告を行っていく。各発表者の発表内容は以下の通りである。

【江島】

第 1 発表を務める江島は、本パネルの総論的役割を果たす。具体的には、戦後日本における宗教系大学および宗教関連学部・学科の全体像を提示することを試みる。『全国大学一覧』の調査を基盤にして、1）全宗教系大学の設置の歴史、2）宗教関連の学部・学科の設置および変遷の歴史、3）平成 28 年段階において宗教者養成を行っている全大学の一覧、の 3 点について報告していく。

【藤本】

戦後の大学と神職養成との関係を、現在、神社本庁の高等神職養成機関として指定されている國學院大學、皇學館大学の両大学における神職養成課程について、その学科目内容の変遷から検討を試みる。とくに皇學館大学については、昭和 52 年の神道学科設置に至るまでの経緯と、それに伴う OB 神職の側と教育者側との論争についても指摘したい。

【武井】

本発表では、宗門系の 3 大学（大正大学・立正大学・駒澤大学）で各々行われている浄土宗・日蓮宗・曹洞宗の僧侶（教師）養成に焦点をあてる。教団法規や養成理念、提供されているカリキュラム等の資料調査、さらには養成に携わっている大学教員へのインタビューを通して、大学ごとの類似点や特徴を明らかにしていく。また、比較を通して養成に関する類型を提示することも企図している。

【齋藤】

本報告では、キリスト教聖職者の制度およびその養成制度を教会間で比較することにより、キリスト教系大学における聖職者養成の多様性を明らかにする。これまで十分に議論されることがなかった大学内での養成方法や養成実態の多様性について、プロテスタント教会、カトリック教会のデータから実証的に報告していく。

なお、コメンテータは、同志社大学で長年に渡って聖職者養成に関わってきた原誠氏にご登壇いただくこととなっている。ご自身の経験を踏まえていただきながら、パネリストとともに活発な議論を行っていきたいと考えている。

最後になるが、本パネルの意義に触れておく。宗教者養成の研究というと、任意の教団における特殊な事例を取り扱っている、との理解をされることがある。しかし、我々はそうは考えていない。上記に掲げた①～④に関する内容は、各々の教団が宗教者資格をどのように定義し、どのような宗教者を輩出したいのか、ひいては教団の将来構想にも接続していく重要かつ普遍的な事項であると位置づけている。また、本パネルでは大学内養成を共通の視点・方法として採用しているため、宗教間比較を容易に行うことができる。比較を通して、大学内養成に関する類似点や特徴、さらには課題などについても議論していきたいと考えている。

暦を通して宗教史を語りなおす

代表者：林　　淳
渋川春海「日本長暦」の影響　　林　　淳（愛知学院大）
梵暦運動と宿曜道・仏暦－暦から見る近代仏教史－　　岡田　正彦（天理大）
近代における編暦と頒暦　　下村　育世（東洋大）
海外日系人社会における宗教カレンダーの歴史　　中牧　弘允（国立民博）
コメンテータ：對馬　路人
司会：林　　淳（愛知学院大）

暦についての研究は、おもに天文学史と歴史学の研究者によって進められてきた。たとえば渡辺敏夫『日本の暦』や岡田芳朗の著作は、それぞれの分野を代表する成果として、現在も参照され読まれてきている。渡辺の研究は、日本の暦について関係する膨大な史料・資料を博捜して、通史的叙述を行った労作である。他方で岡田は、日本古代史学の立場から研究をはじめて、しだいに日本だけではなくアジア各地の暦をも視野に入れて、「暦の総合学」を打ち立てたといえる。基本的には岡田の研究は、歴史学の方法を採用している。

先駆者である二人が対象化した暦の世界は、あまりに広大であり、大きな世界地図のようなものである。それゆえに、その地図を手がかりにして旅行先を決めることはできても、現地を歩くためには我々は、より緻密な地図を必要とする。先学の議論を踏まえた上で、緻密な考察を展開したいと考えている。さらに暦の研究が、天文学史や歴史学以外の人文学諸分野にどのように関わるものなのか、暦を通路として、どういう研究の世界を開こうとしているのかを具体的に議論をする必要はある。

本パネルは、宗教学を専攻とする研究者による共同研究である。宗教研究の世界では、暦に興味を寄せる人は多くない。本パネルでは、暦を対象にしながら宗教史を語りなおすことを試みる。かつて中牧弘允は「考暦学」を提唱し、「文明と宗教の関係を解明するときに暦はひとつの切り口として活用できるはず」だと述べ（『カレンダーから世界を見る』）、暦の可能性をやや控えめに示唆したことがあった。中牧の本から十年がたった。中牧にならえば、宗教史を語りなおすための「切り口」に暦はなると声を大きくして主張してもよいと考えている。

さらに暦の研究が大切であるのは、暦が生活の中で使われてきたモノであるという点にある。われわれは、それを見て、解読し、触れ、楽しむこともできるモノでもある。それはまた収集の対象にもなりうる。研究が専門家による内輪話にならないためにも、モノに密着しながら議論を組みたてることが必要である。その意味ではモノに則して考えていく点で、宗教マテリアル論の試みであると表現することもできる。

林淳の発表は、渋川春海が作成した「日本長暦」が、平田篤胤の「天朝無窮暦」などに与えた影響を再考するものである。「中国暦伝来以前に日本には固有の暦があった」とする春海の思考法が、本居宣長、篤胤に影響を与え、「天朝無窮暦」の作成を刺激し、さらに近代において「三正綜覧」にもつながったことを論じる。

岡田正彦の発表は、普門円通を「梵暦開祖」とする人々が頒布した暦の実態を明らかにし、近世・近代における「宿曜道」の再生と「仏暦」の頒布に至る過程を考察する。これまで、あまり知られていない暦史の一側面に光を当てる。

下村育世の発表は、明治初期から帝国憲法発布期までを中心に、近代における官暦の編纂と頒布の所管の変遷を概観する。これを通じて、神宮司庁に頒暦の権限が移り（明治 15 年）東京天文台が編暦に携わる（明治 21 年）時期が、近代の暦の歴史において「開化」と「復古」（伝統の創造）の共存の体制が確立する画期点であったことを論じる。

中牧弘允の発表は、明治以降の海外日系人社会においてカレンダーがどのようにつくられ、つかわれてきたかを点描する。対象社会としてはハワイを含むアメリカ、ペルー、そしてブラジルであり、日本の伝統の持続と変容について、とくに宗教教団の発行するカレンダーを中心に据えて論じる。

コメンテータは、社会学の立場から近代宗教史を研究してきた對馬路人にお願いした。新宗教を中心に近代の宗教史全般を詳しい對馬には、広い立場からのコメントを期待している。

キリスト教殉教と歴史的記憶

代表者：カルラ・トロヌ
マカバイ殉教者を記憶する初代教会の思想　淺野　淳博（関西学院大）
キリシタン時代における殉教の理解と記憶　狭間　芳樹（大谷大）
日本の殉教者の歴史的記憶と宗教的アイデンティティ　カルラ・トロヌ（京大）
現代日本における殉教論と歴史的記憶　芦名　定道（京大）
コメンテータ：岩野　祐介（関西学院大）
司会：狭間　芳樹（大谷大）

キリスト教史において殉教者が、神と人とを仲介する存在、すなわち聖人と見なされ、聖遺物とともに信仰対象になると、以後、聖人伝や殉教者伝は、宣教に際して重要な役割を担うこととなった。16 世紀の日本において殉教現象がおこったことは国内外に伝えられ、記憶されていくが、そうした記憶というのは個人としてではなく、あくまでも共同体によりつくりあげられた「歴史的記憶」だったといえる。

本パネルでは、キリスト教殉教の歴史的記憶を探るにあたり、まず原始キリスト教時代の殉教に対するパウロの理解を確認し、その上で、パウロ以降に形成されたカトリックの殉教概念をキリシタン時代の来日宣教師が説いた史料を検証することで、民衆層から殉教者が輩出された背景を考察する。次いで、日本の殉教者という存在が、禁教期を通してどのように伝えられ、カトリック教会やカクレキリシタンによって記憶されていったのかを分析する。さらに殉教という概念や現象が現代日本のキリスト教界にとって如何なる意味を有しているのかについての考察をおこなう。個々の発表内容は以下のとおりである。

発表者 1（淺野）　セレウコス朝支配下のユダヤ人による抵抗運動（前 2 世紀）がいわゆるマカバイ殉教思想を育んだ。圧政下のユダヤ人共同体はこの殉教物語を鮮明に記憶し、それはローマ支配下の原始教会へと系統的に引き継がれた。この歴史的記憶が継承される様子をパウロ神学、とくにイエスの死の救済的意義と、イエスの受難にキリスト者が倣う意義への洞察において確認する。これを起点として、初期教会がいかに殉教を捉えて継承したかを概観する。

発表者 2（狭間）　日本宣教を主に担ったイエズス会が殉教概念を、どのように説いたのかについて『こんてむつすむんぢ』（捨世録）などのキリシタン版をもとに検証するとともに、イエズス会士が仏教語を援用しながら邦訳、説明したことが、当時の人々にキリストの受難を理解させる糸口となり、殉教精神を涵養させる土壌をつくりだしえたことを考察する。その上で弾圧に備えての信仰共同体（コンフラリア）において殉教者に対する〈記憶〉が如何に形成されていったのかについても言及する。

発表者 3（トロヌ）　16、17 世紀の日本では、多くのキリシタンが殉教した。近世から現代まで、遠く離れた時代や場所において、日本で殉教した者の記憶がどのようにつくられてきたのかということを、殉教伝や美術品、儀式、聖遺物、場所などから検証する。そして、カトリック教会・カクレキリシタン共同体の宗教的アイデンティティにおける殉教者の歴史的記憶の役割を考察する。

発表者 4（芦名）　キリシタン殉教は日本キリスト教史の出来事として記憶され、その影響は日本人の宗教性のなかに深く遠く現代にまで及んでいる。しかし、それは必ずしも自覚された影響ではなく、キリシタン殉教が日本のキリスト教にとって歴史的記憶であるかどうかは問題であり、それは歴史的記憶とは何であるかについての議論を要求する。ここでは、現代日本のプロテスタント思想における殉教論にも留意しつつ、キリシタン殉教の問いにアプローチしたい。

以上、4 名の発表を受けて、岩野がコメントをおこない、それに対して各パネリストが応答するなかでパネル全体を包括する問題を浮かび上がらせた上で、殉教と歴史的記憶の関わりについてフロアも交えながら活発な議論をおこないたい。現代においても、忠誠心の顕れといった武士の殉死と重ねて語られるなど、不正確に理解されることがある「殉教」は、カトリックの視座からの先行研究においても、いささか情緒的、感性的な漠然としたイメージのもと、おおむね無批判に美化されるにとどまり、未だ十分には検証が進んでいるとはいえず、本パネルを通してキリスト教の殉教現象の内実を探り、その概念の解明を前進させることを目指す。

宗教施設を地域資源とした地域防災のアクションリサーチ

代表者：稲場　圭信
宗教施設と地域防災との関係認識の多様性とその要因　黒崎　浩行（國學院大）
被災寺院が支援者として機能するために必要な外部支援　宮坂　直樹（浄土宗総合研究所）
東日本大震災被災地から窺える地域における寺院・僧侶への期待　藤森　雄介（淑徳大）
公共空間における宗教の新たな連携　稲場　圭信（阪大）
コメンテータ：今岡　達雄（浄土宗総合研究所）
司会：稲場　圭信（阪大）

東日本大震災の被災地では、100 以上の宗教施設が緊急避難所となり、地域資源としての宗教施設の重要性が明らかになった。すなわち、宗教施設には、「資源力」（広い空間と畳などの被災者を受け入れる場と、備蓄米・食糧・水といった物）があり、檀家、氏子、信者の「人的力」、そして、祈りの場として人々の心に安寧を与える「宗教力」があった。一方で、宗教間の協力、宗教施設と自治体、ボランティア組織との連携という点では課題を残している。そこで、本パネルの構成メンバーは、科研「宗教施設を地域資源とした地域防災のアクションリサーチ」（基盤研究 A、代表：稲場圭信、2014–2018）に、研究代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者として参画し、上記の課題に取り組んできた。この研究は、宗教施設と自治体の災害時協力の実態を調査し、防災への取り組みをもとにした宗教施設と地域コミュニティのつながり（ソーシャル・キャピタル）の創出に関するアクションリサーチを実施し、宗教施設を取り込んだ地域防災の構築を目的とする。具体的には、(1) 全国の自治体と宗教施設の災害時協力の実態調査、(2) 端末やスマートフォンで使用可能な「災害救援マップ」システムの開発、(3)「災害救援マップ」をツールに、大阪、東京等をモデル地域として宗教施設と自治体、学校、NPO 等によるつながりの創出に関するアクションリサーチ実施、(4) 成果に基づき宗教施設を取り込んだ地域防災の仕組みを全国レベルで構築することである。

この 4 年間、全国の自治体と宗教施設の災害時協力や災害協定の書面調査、社会福祉協議会や自主防災組織などの地域連携についての聞き取り調査の実施により、具体的にどのような災害時協力・災害協定が可能か、現状と課題を抽出した。開発を進めたタブレット端末・スマホ対応の「災害救援マップ」システムを使い、熊本地震、九州北部豪雨水害、島根県地震等の被災地での実地調査や、宗教施設との連携による防災まち歩きも行っている。本パネルは、「宗教施設を地域資源とした地域防災のアクションリサーチ」と題して、上記の研究実践の成果を報告するとともに、アクションリサーチの意義についても検討する。宗教施設を地域資源とし、防災対応を基礎にソーシャル・キャピタルを見える化し、新たな縁を実践的に模索する本試みは、宗教社会学の新しい研究領域を開拓するとともに、今後の宗教と市民社会を見る上でも重要な示唆を与えるものとなろう。

第 1 発表者の黒崎は、複数の地域（東日本大震災および熊本地震被災地域、南海トラフ地震津波被害想定地域、首都圏）で実施した聞き取り調査をもとに、宗教施設と地域防災との関係に対する当事者の多様な認識の整理を試み、その背景・要因を探る。第 2 発表者の宮坂は、檀信徒の対応や犠牲者の供養、堂宇の再建など住職としての責務と同時に、支援者としての役割を求められる被災地域寺院の苦悩に関するこれまでの調査結果から、そうした寺院や僧侶に必要な外部支援について考察する。第 3 発表者の藤森は、これまで行ってきた、東日本大震災に際して様々な支援や役割を担った宗派教団、被災地寺院、仏教系団体、また支援を受けた地域の社会福祉協議会へのアンケート調査結果から、地域社会が寺院、僧侶に期待するものは何かについて論じる。第 4 発表者の稲場は、宗教施設を地域資源とする防災・災害時支援の連携を公共空間における宗教の参画、宗教の社会貢献の観点から検討するとともに、アクションリサーチの意義についても論じる。コメンテータ（今岡）は、上記の 4 発表を受けて、宗教者・研究者として宗教の社会貢献や防災を研究・実践する立場からコメントを述べる。

2018 年 7 月 25 日発行
編集・発行　日本宗教学会 第 77 回学術大会 実行委員会
〒603-8143　京都市北区小山上総町　大谷大学内
E-mail : jars77th@gmail.com
HP : http://jpars.org/conference/